

(国際会議報告)

第3回アジア太平洋昆虫学大会に参加して

農林水産省果樹試験場カンキツ部 **あら 新** **い 井** **とも 朋** **のり 徳**

第3回アジア太平洋昆虫学大会は、1997年11月16日から22日まで、台湾の台中市で開催された。筆者は、科学技術振興調整費「重点基礎」の予算を得て本大会に参加する機会を得たので、学会の様子や印象などを中心に述べてたい。

台湾は人口が約2,000万人、面積は約3.6万km²で、人口密度は世界でも最も高い地域の一つである。今回大会が開催された台中市は、台湾中部の人口約80万人、台北、高雄に次ぐ台湾第3の都市である。市内は昼も夜も活気に満ちており、台湾経済の好調さを実感することができた。

学会会場は、台中市のほぼ中心部にある国立自然科学博物館であった。博物館は地上2階、地下1階建てで、各階にいくつもの展示場があった。学会参加者は博物館にほぼ自由に入場でき、中国古代の先端技術や台湾の民俗、長江文明展など、いろいろな展示場を見学することができた。

ポスター、シンポジウムを含めた総講演数は276で、発表者の国籍は多い順に、日本114、台湾78、アメリカ18、韓国11、インド10、…（以下略）となり、日本と台湾の研究者だけで発表の7割を占めていた（概要集より）。講演の内訳を見ると、表-1のように、シンポジウムが6部門、一般講演が15部門で、広い分野にわたり研究成果が発表された。

筆者はポスター発表を行った。会場は1階ロビーで、発表期間は17日から21日であった（ただし、会場設営の関係で、17日の発表は行えなかった）。ポスター発表では73題が予定されていたが（表-1）、そのうちの40題は日本人の発表であった。ポスター発表者は、発表期間中、14時から16時まで会場にいて質問等を受け付けなければならなかった。ただ、この時間帯は他の一般講演の開催時間と重なったため、見学者だけでなく発表者も少なく、会場は少々寂しい雰囲気であった。ポスターの発表時間は午後の休憩時間とも重なったが、休憩場は会場の一つ下の階であったため、休憩している人が会場ま

表-1 発表項目別の講演数（概要集より）

発表項目		講演数
シンポジウム		
1	昆虫のフェロモン	17
2	コナジラミの生物的防除	13
3	アジア・太平洋におけるIPM	9
4	アジア・太平洋におけるミバエ	9
5	野生蚕	17
6	殺虫剤抵抗性	7
一般講演		
1	形態学・系統学・進化学	20
2	昆虫生理学	6
3	分子生化学	11
4	行動学・個体群生態学	18
5	社会性昆虫	9
6	博物学・目録	3
7	衛生害虫	5
10	農業昆虫	9
11	貯蔵昆虫	2
12	病理学・微生物的防除	6
13	生物的防除	14
14	毒物学・殺虫剤	3
16	生物農薬	4
17	ダニ学	8
18	アジアにおけるIPM	13
ポスター		73
計		276

で訪れることはほとんどなかった。ポスター会場と休憩場が同じ階であれば、休憩時間中にもっと多くの見学者が会場にきたのではないかと思われた。

一般講演、シンポジウムは地下1階の四つの会場で行われた。（筆者には）アジアの農業といえば、コメ、チャ、カイコが思い浮かび、これらに関する研究が多数報告されると思われたが、コメ、チャに関する報告は以外と少なく、畑作物、果樹に関する報告が多かった。この理由として、中国や東南アジア等の国々から参加した研究者が少なかったこと、コメよりも収益の高い作物の栽培が広まり、それに対応した研究が行われるようになったこと、畑作物では抵抗性のため薬剤防除が困難になり、その対策として多くの研究が行われたことなどという想像できたが、本当の理由についてはわからなかった。

一般講演では、果樹害虫を中心に参加した。内容は、

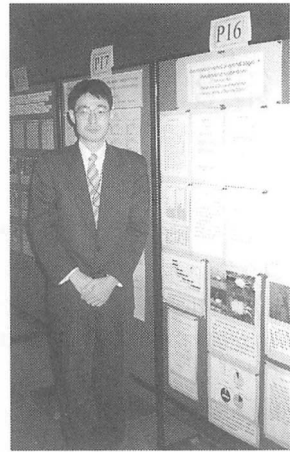
Impression of The Third Asia-Pacific Conference of Entomology, Taichung, Taiwan, on 16-22 November, 1997. By Tomonori ARAI

（キーワード：国際会議報告，亜太昆虫学大会）

フェロモンを使ったモニタリング、生態の解明など、多岐にわたっていたが、これら研究の多くは、得られた成果を基に、害虫防除を農業だけに頼らない、IPM を目標としているように感じられた。

また、コナジラミの生物的防除に関するシンポジウムにも参加した。ここでは、近年世界的に問題となったシルバーリーフコナジラミに関する発表が多数行われた。天敵類の探索や放飼のような話題に先立ち、PCR やエステラーゼ等の手法を用いた種の判別法、コナジラミ類の生態・防除上の問題点など、筆者にとってわかりやすい内容の講演から始まった。そのおかげで、コナジラミを専門としていなくても基礎的な事項を頭に入れることができ、本題の内容が理解しやすくなった。施設では、本種の防除に寄生蜂や病原菌を利用した研究が行われ、高い成果が得られていた。近い将来この害虫に対する生物的防除が実用化するのではないかと思われた。また、露地における天敵導入についても研究され、探索と放飼効果の評価に関する報告が行われたが、こちらは実用化までにはまだ時間がかかるように感じられた。その他のコナジラミとしては、台湾に侵入した *spiraling whitefly* の天敵導入に関する報告があった。台湾では冬季の低温、時期的な寄主密度の低さ、薬剤散布等が生物的防除の阻害要因となっており、これら問題の克服が課題となっている。

学会4日目は、ツアーに参加した。車酔いを催すような座席位置の高いバスに乗って、バナナ園? (正式な名称は忘却)、日月潭、台湾省特有生物研究保育センターなどを巡った。特に印象に残ったのは最初に訪れたバナナ園である。バナナ園は、観光園のような所で、おみやげを売っている店舗の周りをバナナが取り巻いていた。ここで、*spiraling whitefly* と思われるコナジラミが何本かの木で発生していた。前日の講演で説明があったとおりに渦巻き状に産卵され、幼虫が発育した跡や、成虫を見ることができた。ただし、コナジラミによるすす病



ポスター発表中の筆者

が発生した様子は認められなかった。果樹害虫の観察という、思わぬ機会を得ることができ、有意義なツアーであった。

今回の学会では、筆者が初めて体験したことがいくつかあった。特に印象に残ったのは以下の点である。学会期間中、10時と15時には約30分の休憩時間があり、地下1階のロビーにお茶と軽食(お菓子など)が用意された。これは、外国語の講演を聴くことで疲れた頭に休息を与え、エネルギー補給を行えたので大変ありがたかった。また、そのすぐ近くにはパソコンが3台設置しており、インターネットを介して世界各地にメールを送ることができた。インターネットによるメールサービスは、今後、国際学会などでは普通に行われるようになるのかもしれないと感じた。

今回の学会に参加して、いろいろなことを見聞でき、大変有意義な時を過ごせた。この経験を今後の研究に生かして行きたい。次回はマレーシアが開催国であると聞いているが、近隣の国々からも多数の研究者が参加する国際色豊かな大会となればよいと思う。